

平成三十一年四月十日発行  
皇學館論叢第五十二卷第二号  
抜刷

研究ノート

勅撰和歌集における部立「神祇部」について

水  
尻  
成  
美

## 勅撰和歌集における部立「神祇部」について

水尻 成美

## はじめに

本論では勅撰集における神祇部の成立過程を明らかにしていく。神祇部は、千載集においてはじめて一卷立てされた部立である。神祇部の成立についての研究は、兼築信行氏の「中世和歌と神道——部立・神祇をめぐって」<sup>(注1)</sup>が唯一のものである。同論文では、神祇部の様相を通覧し、神祇部の成立には、釈教部との間に顕著な対意識が見られ、対として成立した神祇・釈教は、和歌の宗教的領域として相互に比肩すべきものと公的に理念化されたものとされている。古今集・拾遺集に神事関係歌が見られ、後の神祇部立の特立へ連なる系譜が見られると述べられているが、特立に連なる系譜に関しては詳しく考察されて

はいない。そこで、本稿では千載集以前に見られる神祇に關係する部立や和歌に着目して、神祇部の成立過程を明らかにしていくことにする。

資料として千載集以前の勅撰集と統詞花集を取り上げる。統詞花集は私撰集であるが、初めは勅撰集として作られており、部立において後の勅撰集とつながりが見られるため、本論文では勅撰集と同等に扱う。

## 第一章 歌謡の推移について

古今集において神祇の要素が見られるのは巻二十であり、構成としては大歌所御歌・神遊びの歌・東歌からなる。<sup>(注4)</sup>歌数は十八首である。

大歌所御歌は、新嘗祭などの節会に供奉する令外の部署の大歌所で伝承・管理する歌である。一〇六九から一〇七三までの五首が大歌所御歌にあたる。大歌所御歌は古今集のみに見られ、続く勅撰集では見られない。

一〇七四から一〇八六までの十三首が神遊びの歌である。神遊びの歌は、神前で演奏し歌うその歌のことである。神遊びは神楽の古称であり、歌謡であると言える。その中を分類すると、採物の歌・日霊女の歌・返し物の歌・大嘗会の歌となる。一〇七四―一〇七九の採物の歌は、神前で楽人が手に持つて舞う「採物」についての歌である。櫛・葛・弓・杓を採物としている歌がある。一〇八〇の日霊女の歌とは天照大神を祭る歌である。一〇八一の返し物の歌は、神楽が終わり舞人に続いて陪従が退出するときに歌われる歌である。大嘗会の歌は、天皇が即位されるときに行われる大規模な新嘗祭で詠まれた歌である。大嘗会の期日は十一月の中の卯の日から午の日までの四日間である。一〇八二から一〇八六までが大嘗会の歌である。

東歌は、宮廷または諸社の神事において演奏された東遊びの歌詞である。または、神事に関係なく宴の場で謡われたものであると言われている。いわゆる「謡い歌」である。

これらを見ていくと、古今集の卷二十所収歌の特徴は、歌として声を出して歌われていた、音楽に近い音声言語の性質を

持っている歌であることが分かる。また、作者が不明であることから、伝承された歌が採録されていると考えることができる。すなわち、古今集の神祇に関わる部立においては、いわゆる歌謡を多く採録しているのである。

この点を踏まえて、神祇に関わるということを考えたときに、歌謡という歌の種類が関わっているのではないかと考えた。まずは、勅撰集における歌謡の推移から考えていこうと思う。

初めに、拾遺集についてみていく。拾遺集は、巻十に神楽歌と呼ばれる部立がある。神楽歌は、神前で舞楽とともに唱和されている歌謡のことである。神楽歌は大きく分けると採物（神おろし）、前張（神あそび）、星（神あがり）に分けることができる。これに伴って分類をしていくと五七六から五八三までの歌が採物の歌にあたり、櫛・幣・杖・弓・剣について歌われている。神おろしという名前からも分かるように、神事の中で最も中心的な「神を招く」意味の内容を持つ歌であり、神楽では本と末に分かれて唱和される。五八五、五八六の歌が大前張と呼ばれる歌にあたる。大前張とは短歌形式が核となる格調の整った正雅な民謡的な歌謡である。五八四の和歌が、神あがりの歌で星といわれている日霊女の歌である。

古今と拾遺の二集を見た時に、歌謡の中でも「神楽歌」を大きく取り上げていること、採物の歌において櫛と弓が共通して

おり、日霊女の歌を採集していること、更に、作者が不明な和歌が採録されているという共通点が見られる。作者が不明ということから、古今集や拾遺集ができた時代よりも古い時代から伝承され続けてきた歌である可能性が考えられる。

次に、後拾遺集において歌謡はどのように採集されているのかを見ていく。卷二十雑六の一六八、一一六九、一一七〇の三首が、帝の諸社行幸に際し謡い物として謡われた歌の群とされる。詞書に「うたふべき歌」という言葉が共通して見られ、歌謡の性質を持っている。

後拾遺集卷二十雑六神祇一一六八

一条院の御時、初めて松尾の行幸侍りけるに、

うたふべき歌つかうまつりけるに 源 兼澄

ちはやぶる松の尾山のかげ見ればけふぞ千歳のはじめなりける

この歌は松尾社への行幸の時に詠まれた歌である。次に続く二首も日吉社、祇園社と行幸の先は違いがあるものの、詠まれている内容は社の永遠性と帝の治世をことほいだものである。この二首の詞書には、「東遊びにうたふべき歌」とある。三首が詠まれた時期を見ていくと、一一六八は寛弘元年（一〇〇四）に、一一六九、一一七〇は延久三、四年（一〇七一、一〇七二）に行幸があり、二首は同時期に詠まれているが一一六八は詠ま

れた時期が違うことが分かる。

このことから、編纂に際して同じような内容の和歌を集め配列したと考える。さらに、これらの歌謡は今までに挙げた歌謡と違って、作者が分かっている。このような歌は、後拾遺集から見られ、歌謡として伝承されたものではなく、謡い物としての歌が新しく作られるようになったことが知られる。また、一一六八、一一六九の和歌は梁塵秘抄の神社歌に採録されている。これは、歌謡という観点で見えていくときに大きな手掛かりになる。

梁塵秘抄とは、平安期の歌謡集で撰者は後白河院である。歌謡集に採録されているということは、歌として歌われていたものであるということが分かる。勅撰集の中には、歌謡として採録されていないが、梁塵秘抄では歌謡として採録されている和歌がある。

これに該当する和歌で最初に登場したのは、拾遺集の五九二、五九三である。内容としては神社歌で、この二首は神社歌として最初に勅撰集に採録された歌でもある。

次いで後拾遺集の一六六、一一六七、一一六八、一一六九、一一七五の五首がある。それぞれ意味を考えていくと、一一六六は神に祈願する歌、一一六七は住吉の遷宮に事寄せてすべての物が移り変わることを嘆いた歌、一一六八、一一六九は前に述

べた意味である。一一七五は神社への行幸を詠んだ歌であった。これら以外に勅撰集から梁塵秘抄に採られた歌はない。この七首は、それぞれの和歌集が作られた時には歌謡というまとまりでは集められていない。それぞれ歌の内容で配列されている。しかし、後に作られた梁塵秘抄に採集されているということは歌謡ということである。

これらについては二つの考え方が可能である。一つは、元から歌謡であったが歌謡というまとまりではなく歌の意味で配列したというもの。もう一つは、勅撰集に配列された時は歌謡ではなかったが、後に音や舞がついて歌謡になったというものである。どちらにしても、これらの和歌は歌謡になりうる要素を持った歌であった。

ここまでを見てくると、神祇に関する歌を集めた部立には、歌謡という要素が関わるのではないかと考えられる。千載集の神祇の部立には、大嘗会の歌で神遊の歌と分類されている和歌がある。これらの歌は歌謡にあたるのか。今まで見てきた神遊の歌と呼ばれている分類は、神事の際に歌われた歌謡であると述べてきた。この大嘗会の歌はどうであろうか。これに関しては、八木意知男氏が「風俗和歌は何れも、楽所にて曲が附けられて奏上されるものであつて、口頭表現たるうたうという行為をもつて発表される。」と述べている。<sup>(注)</sup>大嘗会和歌の風俗和歌

は歌謡といつてもよい。

千載集巻二十における大嘗会和歌の神遊びの歌も風俗和歌の一種である。このことから、千載集で見られる神遊の歌は歌謡であり、歌謡という要素は古今集から神祇部が成り立った千載集まで継続して取り上げられていることが分かる。

歌謡としての和歌は、神祇という部立が成立するまで採録され続けている。作者が不明な神樂歌、新しい歌謡として作られた東遊びの歌、大嘗会の神遊びの歌と、内容に違いはあるが、すべて歌謡の性質を持っている。大嘗会和歌では、謡うことを目的としている風俗和歌が古今集から千載集に至るまで採録されていた。また、後に梁塵秘抄に歌謡として採集された和歌も勅撰集の中に見られた。

これらのことから、歌謡と神祇は関わりがあるとみられる。内容は、神様に対して奏上するための歌から、帝をもてなすための歌などが多く採録されている。いずれにしても高貴なものに対して謡われたものであると考えられ、古今集から音声言語としての和歌が始まり、神祇部として部立が成立するまで継続して一つの歌の種類としてみることができる。

## 第二章 神祇部における大嘗会歌について

### 第一節 大嘗会歌の配列されている部立(巻)の変化について

大嘗会の歌については、採集されている部立に特徴がある。はじめに大嘗会の歌とはどのような和歌であるのか押さえておく。『和歌文学大辞典』によると「大嘗会屏風和歌・大嘗会悠紀主基和歌とも。天皇の一世一度の即位の儀を大嘗祭、その饗宴の節会が大嘗会と言い、卜定された悠紀・主基の阿蘇国から和歌が詠進された。この和歌が大嘗会和歌である。」とある。<sup>(注6)</sup>

古今集から神祇部が成立する千載集までの大嘗会の歌についてみていく。大嘗会和歌は次のように採録されている。

古今集 卷二十 神遊びの歌 (五)

後撰集 無し

拾遺集 卷五 賀 (一) 卷十 神楽歌 (二二)

後拾遺集 卷七 賀 (二)

金葉集 薪四 冬 (一) 卷五 賀部 (五)

詞花集 卷十 雑下 (二)

続詞花集 卷七 賀 (二)

千載集 卷十 賀 (七) 卷二十 神祇 (八)

内容は、賀に採録されているもの、神祇に関わる部立に採録

されているもの、どちらにも採録されているものがある。大嘗会の歌がこの二つの部立に採録されるにあたって、どのような変化が見られるのであろうか。はじめに、それぞれの集から分かったことをまとめていく。

古今集は、神遊びの下位分類として大嘗会の歌がある。主基が二首、悠紀が三首である。歌の種類としては風俗和歌である。作者はわからない。古今集において大嘗会の歌は類型的で、おおよそ左のような歌である。

古今集卷二十神遊びの歌一〇八二

真金ふく吉備の中山おびにせるほそたに河のをとのさやけさ

この歌は、承和の御嘗の、吉備の国

内容は、大嘗会が行われた場所に寄せて自然を詠むものや大嘗会の賛美を詠むものである。

拾遺集は、巻五の賀に一首風俗和歌があり、巻十の神楽歌の後半にも大嘗会の歌がまとまって配列されている。ここには安和元年の悠紀の風俗歌が十一首、天禄元年の大嘗会の悠紀の風俗歌が九首採集されている。また和歌を詠んだ作者が記されるようになった。ここで見られる大嘗会の歌は次のような和歌である。

拾遺集卷十神楽歌六〇〇

岩蔵山

よみ人知らず

うごきなき岩蔵山に君が世を運びをきつ、千代をこそ積み  
内容としては、岩蔵山に寄せて、御代の長久を予祝する歌で  
ある。このほかにも採録されている和歌の内容はおもに、天皇  
の御代の長久を祈る和歌であった。

後拾遺集は、巻七の賀に二首あり、四八五、四八六のどちら  
とも屏風歌であり、二首とも悠紀である。今までと違うのは、  
後拾遺集には雑六の下位分類として神祇が現れたのにもかかわ  
らず、これには大嘗会の歌が見られないことである。

金葉集は、巻四の冬の部に一首主基の歌が入っており、巻五  
の賀の部の中心に三二五から三一九に大嘗会の歌があり、主基  
方が四首、悠紀方が一首入っている。三一五と三一七の和歌の  
内容は、詞書を見ると奏楽を伴う和歌であることが分かる。

大嘗会主基方辰日参音声、鼓山をよめる 藤原行盛

音高き鼓の山のうちはへて楽しき御代となるぞうれしき

已日楽破に雄琴郷をよめる (藤原敦光朝臣)

松風の雄琴のさにかよふにぞおさまれる代の声は聞ゆる  
詞花集は、巻十の雑下に二首のみ入っている。三八三・三八四  
であり、歌の種類としては屏風歌である。悠紀と主基それぞれ  
一首入っている。

統詞花集は、巻七の賀に二首屏風歌がある。三五五は久寿二  
年(一一五五)の大嘗会の悠紀の歌である。三五六は平治元年

(一一五九)の大嘗会の悠紀の歌である。巻八に神祇部がある  
が大嘗会の歌は見られない。

千載集は巻十の賀に六三四から六四〇までの七首、巻二十の  
神祇に一二八二から一二八八まで八首、大嘗会の歌が見られ  
る。今までと比べると、採られている歌数が増加している。賀  
には様々な種類の歌が収められている。屏風歌が二首、稻舂歌  
が二首、風俗歌が三首である。神祇の部立に再び大嘗会の歌が  
採集され、歌の種類は全て神遊の歌であり悠紀が四首、主基が  
四首である。神遊の歌、稻舂歌が大嘗会の歌の種類として初め  
て現れた。神遊の歌は詞書に「神遊の歌」という言葉が入って  
おり、確実に神遊の歌であると分かる。これは、今までの大嘗  
会の歌には無かったことである。これは神祇部に含まれる大嘗  
会の歌全てに見られ、一二八一から一二八八までである。例と  
して、一二八一・一二八二・一二八三の詞書を挙げる。

長元九年後朱雀院の御時、大嘗会の主基方の

神遊の歌、丹波国神南備山をよめる 藤原義忠朝臣

治暦四年後三条院御時、大嘗会主基方神楽の

歌、岩屋山をよめる 藤原経衡

寛治元年堀川院の御時、大嘗会悠紀方神遊の

歌、諸神郷をよめる 前中納言匡房

稻舂歌は大嘗会第一日の卯の日に八乙女が稲を舂きながら歌

勅撰和歌集における部立「神祇部」について (水尻)

う歌であり、『日本国語大辞典』<sup>(註)</sup>によると「大嘗会に神前に備える稻をつくるときにうたう歌。多く悠紀、主基の地名をよみ入れた。」とある。作業をするときの歌であつた。詞書にも「稻春歌」とあり、ほかの大嘗会の種類とは別としてゐることが分かる。例として、六三五・六三八の詞書を挙げる。

白河院御時、承保元年大嘗会主基万稻春歌、

神田郷をよめる

前中納言匡房

同じ大嘗会主基万稻春歌、丹波国雲田村をよ

める

刑部卿載兼

古今集から千載集までをまとめてきたことで二つのことが分かる。

一つ目は、大嘗会の歌が含まれている部立が一つではないということである。今まで見てきたように、神遊びの歌・賀・神楽歌・冬・雑下・神祇の六つの部立に採録されている。神遊びの歌・神楽歌・神祇は、神祇関係の歌を集めた部立であるため祭祀にあたって詠まれた歌である大嘗会歌が採録されていることが分かる。しかし一方で、多くの大嘗会の歌が賀の部立に採録されているのである。同じ大嘗会の歌であるにも関わらず、採録されている部立に違いが見られるのは何故なのか。

二つ目は、大嘗会の歌にもいくつか歌の種類があることである。大嘗会の歌には大きく分けて「風俗和歌」「屏風和歌」が

あり、さらに「風俗和歌」は小分類としての「風俗和歌」と「稻春歌」「神遊の歌」があるということがわかった。

この二点は、大嘗会の歌が配列されている部立を考えるうえで注目すべきではないかと考える。歌の種類によって採録される部立に違いが出ているのではないだろうか。屏風和歌から見っていくと、古今集・拾遺集には屏風和歌は採録されていない。後拾遺集において初めて賀の部に二首採録されている。金葉集に屏風和歌はみられない。詞花集は巻十の雑下に二首、続詞花集には賀の部に二首、千載集において賀の部立に二首採録されている。屏風和歌は、勅撰集に入集する場合は賀の部立に採録されている。屏風和歌は、神祇に関する部立に入らないのである。次いで、風俗和歌という観点から見っていくと、神祇に関する部立においては、古今集の神遊びの歌の中に大嘗会の歌という歌群が見られ、ここには風俗和歌のみが採録されている。拾遺集においても二一首の和歌が部立神楽歌に風俗和歌として採録されている。続く後拾遺集には、風俗和歌は採録されていない。金葉集は、賀に風俗和歌が五首採録されている。詞花集、続詞花集ともに大嘗会の風俗和歌は採録されていない。千載集には風俗和歌がみられ、これは賀の部立に採録されており三首ある。

風俗和歌は、勅撰集が作られ始めた頃は神祇に関する部立に



採録されており、千載集に至る頃には賀の部立に採録されているということが分かる。同じ種類の歌であるのに時代の移り変わりとともに採録される部立が変化した。

風俗和歌は、採録される部立によってその内容に違いが見られるのか、拾遺集・千載集の和歌を二首取り上げて比較していく。

#### 拾遺集卷十神樂歌六〇一

##### 三上の山

能宣

ちはやぶる神の山のさかき葉はみ神の山に生ふるなりけり

#### 千載集卷十賀歌六四〇

##### 今上御時、元暦元年大嘗会悠紀方風俗歌、三

##### 神山をよめる

藤原季経朝臣

ときはなる三神の山の杉村ややを万世のしるしなる覧

この二首はどちらも三神の山について詠んだ和歌であり、悠紀である。三上の山は近江にある山である。拾遺集六〇一は安和元年（九六八）の悠紀の国近江の風俗歌である。神の葉が栄えるというところから、御代が長くこれからも繁栄していくことを予祝している和歌である。千載集六四〇は元暦元年（一一八四）の悠紀の風俗歌である。三上山は老杉に包まれた「御神」の名を持つ神聖な山であり、その山が常緑であることに寄せて、御代が永遠に繁栄し続いていくことを予祝する歌である。

どちらの歌も、天皇の代の繁栄と長久を予祝する歌であり、内容には大きな違いがないことが分かった。

しかし、採録される部立に違いが見られるということは、何らかの撰者の意図があったと考えるべきであろう。

以上の歌は、一見天皇の治世の長久を言祝ぐという点で共通しているように思われる。しかし、詳細に見る時、古今・拾遺と千載集の間には、やはり違いがあるのではないだろうか。

古今集において大嘗会の風俗和歌は、天皇の治世をお祝いするよりも、大嘗祭自体の賛美が多く含まれている。また、音楽に近い音声言語の性質を持つている和歌であることから、歌謡として配列され、神祇に関する部立にまとめられたのではないか。

また、拾遺集において大嘗会の風俗和歌は、御代の長久を予祝した歌が多く採録されているため、内容としては賀の部立に配列されている歌群に近いが、前章で述べた風俗和歌の音声言語の性質を考えると、歌謡としての和歌という一つのまとまりとして成り立っているため、部立神樂歌にまとめられたのではないか。撰者は編纂するときに歌謡というまとまりに重きを置いたことが考えられる。

これらのことから、神祇の部立にみられる大嘗会の歌は、古今集・拾遺集において撰者が歌謡として配列していたが、千載集においては和歌の内容という視点で配列するようになったた

め、神祇に関する部立から賀へと移り変わるといふ変化が起こつた。そのため、神祇の部立には見られなくなつたと考えられるのである。

## 第二節 千載集・神祇部の大嘗会和歌

千載集巻二十神祇部には八首の大嘗会和歌が採録されている。これらの特徴として、詞書に「神遊の歌」「神楽歌」といふ言葉が見られるといふことがある。「神遊の歌」「神楽歌」といふと、思い浮かぶのは、古今集巻二十の「神遊びの歌」と、拾遺集巻十「神楽歌」である。千載集の詞書のそれと、古今集・拾遺集のそれとは関係があるのだろうか。

まず注目したいのは、千載集の歌が、古今集「神遊びの歌」の「採物の歌」で見られた「採物」を詠み込んでいることである。たとえば、

千載集巻二十・一二八八

同じ大嘗会の主基方歌よみてたてまつりける神楽の  
歌、丹後国千年山をよめる 藤原光範朝臣

千年山神の世させるさか木葉のさかへまざるは君がためとか  
右の一首のほか、一二八一・一二八二・一二八六にも神が詠  
み込まれている。また、一二八四には葛が詠み込まれている。  
このように、千載集巻二十に見られる「神遊の歌」「神楽歌」

は、「採物の歌」と記されていないが、内容的には古今集の「採物の歌」に類似しているのである。

ただし、異なる点もある。千載集の「神遊びの歌」には、治世に対する祝意を詠んだものが多く、古今集や拾遺集の歌と異なる。千載集の「神遊びの歌」は、大嘗会の歌としての内容を色濃く持つているのである。

一方、千載集巻二十の大嘗会和歌には、「神」を詠み込んだ歌が多いという点も見逃せない。大嘗会和歌八首のうち七首に「神」が詠み込まれている。古今集の大嘗会和歌で「神」を詠んだ例はない。拾遺集には十九首の大嘗会和歌があるが、「神」が詠み込まれているのは六首に過ぎない。千載集において、「神」が詠み込まれている割合が高いことが分かる。千載集においては、大嘗会和歌の中でも「神」が詠み込まれた歌が、一つのまとまりとして意識されていたのではないだろうか。

これから考えると、大嘗会和歌の中でも「神遊びの歌」や「神楽歌」が千載集巻二十神祇部に採られたのは、古今集の「神遊びの歌」に類似して神事性が強いこと、「神」を詠み込んでいることなどから、神祇性が強いと見られたからではないかと思われる。

### 第三章 神社詠について

神祇に関する部立の中で、かなりの割合を占めているのが神社歌である。千載集で巻二十に神祇部が成り立つまでに、神社歌は、どのように位置づけられていたか考えていく。はじめに、古今集から千載集まで神社の名前が詞書または和歌の中にみられるものを整理する。

古今集においては、神社歌は見られない。

拾遺集で初めて神社が関わっている和歌が見られる。七首あり、関係している神社は住吉（三首）・賀茂・箱崎八幡宮・平野・日吉（各一首）である。歌の種類としては神詠が二首、松の伝承について詠まれたものが二首、祝いの歌が一首、神社に対する祈願が一首である。神社が関わっている和歌は、神楽歌の歌群と大嘗会の歌群の間にまとめられている。神社に関わる歌の初めは、神詠歌から始められている。

拾遺集巻十神楽歌五八七

住吉のきしもせざらん物ゆへにねたくや人に松といはれむ

ある人のいはく、住吉明神の託宣とぞ

後拾遺集では、下位分類ではあるが、神祇という部立名が立てられている。採録されている十九首のうち十八首において神

勅撰和歌集における部立「神祇部」について（水尻）

社が歌に関係している。名前の挙がっている神社として神宮・貴船・今宮・稻荷大社・住吉・松尾・日吉・祇園社・大野原・大山祇・阿蘇・石清水・春日の十三社があげられている。歌の種類として神詠が二首、それに対する返歌がそれぞれ一首ずつ、神に祈願する歌が二首、遷宮に事寄せてすべての物が移り変わることを嘆いた歌一首、帝の諸行幸に際し謡い物としての謡われた歌が三首、神意の現れを詠んだ歌一首、東歌の起源を詠んだ歌一首、神に心服を献ずる歌一首、神社参詣の歌は四首あり、それぞれ神意をたずねる歌、神域を讃える歌、勧請されていることをいぶかった歌、靈験を讃える歌である。そして、歌合で春日祭を詠む一首である。採録されるほとんどが神社に関係する和歌である。内容は、神社信仰や参詣に際して読まれた歌が多い。そのため神祇と称する部立の成立と関係があるのではないかと考えられる。

金葉集では、巻九の雑部上と巻十の雑部下に神社に関係する和歌が五二七・五三〇・五八二・六二五の四首採録されている。雑部上においてみられる神社は、香椎宮・住吉・春日で、雑部下には伊予国一宮が見られる。雑部上で詠まれている和歌は、神木と神を詠んだ歌二首、神使の鹿によってその靈験を賛美する歌が一首、雑部下で詠まれている和歌は、神に対して祈願する歌一首である。神木に寄せて詠んでいる歌が多くみられる。

詞花集では、卷二の夏に二首、卷五の賀に二首、卷十の雑上に三首、卷十の雑下に一首、全部で八首採集されている。歌番号は、五三・五四・一七〇・一七一・三三九・三三九・三四七・四〇八である。詠み込まれている神社は、賀茂・住吉・稲荷大社・春日・広田である。歌の内容としては、賀茂の祭についての歌が一首あり、住吉の神と松について詠んだ歌が三首、春日の神に祈願する歌一首、広田社の歌合による歌一首である。様々な部立に神社歌が採録されていることが特徴である。歌数としては少ないものの住吉を詠んだ歌が多くみられる。

続詞花集は、卷八の神祇の部に採録されている。そのほとんどに神社の名前が挙がっている。詠み込まれている神社は、賀茂が七首、住吉が五首、広田社が一首、熊野が二首、香椎宮が一首、北野天満宮が二首、春日が二首である。賀茂、続いて住吉が多く採録されている。内容は、賀茂の禊の歌四首、賀茂への祈願三首、住吉の神に関する歌五首、広田社の社頭歌が一首、塩屋明神の奉納歌会の詠進歌二首、香椎宮の杉についての歌一首、北野に無実を訴える歌一首、神詠に関わる歌三首である。初めて社頭歌合の和歌が採録された。また、神詠歌が神祇の部を締める形で採録されている。

千載集は、卷二十に神社が関係する歌が採録されている。卷二十の内容としては前半に神社に関する歌、後半に大嘗会の歌

が採録されている。詠み込まれている神社は、住吉・日吉・石清水・貴船・春日・神宮・広田・熊野・三輪・片岡・月読・道祖神である。今までの歌集と比べて詠み込まれている神社の多いことが分かる。また内容としては、神への祈願・祈念が四首、神への謝意が三首、神徳を讃える歌三首、靈験を讃える歌二首、神への訴歎四首、叶わなかったことに対しての述懐二首、恩寵への期待一首、永遠性を説く一首、情景について詠んだ歌四首である。詠まれている神社は多いが、内容は端的にまとまっている。また、歌合で詠まれた歌が多く八首採録されている。また、神社や歌合というまとまりで配列されるところと内容によつて配列されている所があり、整理されていることが分かる。

それぞれの勅撰集ごとに特徴を見てきたが、次はいくつかの観点から史的に見ていく。

初めに、勅撰集の採録歌数の移り変わりから見ていく。採録されている歌数は、拾遺集六首、後拾遺集十九首、金葉集四首、詞花集七首、続詞花集二十首、千載集二十四首である。勅撰集ごとの採録歌数を見ると後拾遺集・続詞花集・千載集に多くの神社歌が採録されていることが分かる。この三つに共通していることは、歌集名が下位分類を含め「神祇」という部立に入っているということである。神祇という部立が成立したことによって、各神社で詠んだ和歌が採録されやすくなったのではな

いか。そのほかの部立名を見ていくと、神遊びの歌・神楽歌と、一章で述べたように歌謡としての要素が中心に考えられているまとまりである。神社歌は歌謡として作られたものではないから、神楽歌という部立にはそぐわない。神祇という部立が成立したからこそ、神社に関する和歌を自由に採録することができるようになったのではないだろうか。

次に、和歌の配列を取り上げてみたい。拾遺集・後拾遺集は、和歌を詠んだ場面や内容によって配列されていた。拾遺集では神託、伝承、障子歌とまとまっている。金葉集・詞花集はともに十巻の勅撰集であり大きい歌集とは言えず、神祇に関する部立はないため採録されている和歌としては少ない。採録されている神祇に関する和歌を見ると大嘗会の歌を除き残りは神社に関する和歌である。しかし、歌数が少ないため和歌のまとまりはない。続詞花集においては、神社ごとにとまとめて和歌が配列されている。はじめに賀茂のまとまりが見られ、次に住吉のまとまりが見られる。これは、千載集においても同じである。賀茂や日吉は神社のまとまりとしてみることができる。しかし、千載集においては和歌に込められた内容でも配列されていると考えることができる。謝意、訴歎にまとめられている。よって神社歌は、採録され始めたころは和歌に込められた内容で配列されていた。しかし、続詞華集・千載集では神社ごとのまとま

りでの配列も意識されるようになった。和歌の内容から神社ごとの配列意識に変化していると見られる。

次に、神社歌の神社ごとの歌数を調べ整理した(表一)。

神社別でみていくと住吉と賀茂が多くみられる。このことから、住吉と賀茂は神社歌を読むときの代表的な場所であるということが分かる。続詞花集・千載集において、特に目立つ。また、春日・日吉・貴船もよく詠み込まれる神社である。

次に、勅撰集神祇部の採録歌の内容で整理していく。すると表二のようになる(歌合は他項目と重複がある)。

神詠は、拾遺集・後拾遺集・続詞花集においてみられる。神詠歌が配列されている位置は、拾遺集が巻十の神社歌の始まり、後拾遺集は巻二十の神祇部の始まり、続詞花集は巻八の神祇部を締める形で配列されている。これらのことから、神社歌の中でも神が直接関係する和歌として意識され、神社歌の始めや締める位置に配列されたと考えられる。

神木と神の歌は神社と関係する和歌が採録され始めてから継続的に見られる歌の種類である。特定の神社には決まった神木があり、杉や松がよくみられる。

拾遺集巻十神楽歌五八九

住吉に詣でて

安法、師

天くだるあら人神のあひをひを思へば久しき住吉の松

表一 神祇歌における神社別採録歌数

	古今集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	統詞花集	千載集	総歌数
住吉		587 589 590	1167 1175	530	170 171 329	368 369 370 371 372	1257 1261 1262 1263 1264 1265	20
賀茂		588			53	358 359 360 261 365 366 367		9
箱崎八幡宮		591						1
平野神社		592						1
日吉		593	1169				1275 1276 1277	5
石清水			1174 1176				1280	3
貴船			1162 1163 1177				1270 1274	5
春日			1178	582	339	380 381	1256 1260	7
香椎宮				527		376		2
神宮			1160				1278	2
一宮				625				2
稲荷大社			1166		408			2
広田社					347	373	1266	3
熊野						374 375	1258 1268	4
北野天満宮						379 382		2
三輪							1267 1269	2
片岡							1271 1272 1273	3
月読							1279	1
今宮			1165					1
松尾			1168					1
祇園社			1170					1
大野原			1171					1
大山祇			1172					1
阿蘇			1173					1

表二 勅撰集神祇部の内容別和歌採録数

神詠（返歌）		六首（三首）
神木と神、伝承		十一首
神社への心情	祈願	十六首
	訴歎	十首
	神への謝意	三首
	神徳、靈験を讃える	八首
	神域を讃える	六首
神意の現れ、神について		五首
祭、禊を詠む		七首
謡い物		四首
祝い		一首
その他		二首
歌合		十二首

拾遺集卷十神樂歌五九一

箱崎を見侍て

重之

幾世にか語り伝へむ箱崎の松の千とせの一つならねば

金葉集卷九雜部上五二七

隆家卿大宰帥にふた、びなりて、のちのたび

香椎社に参りたりけるに、神主ことのものと

杉の葉をとりて帥の冠りに挿すとよめる

神主大膳武忠

ちはやぶる香椎の宮の杉の葉をふた、びかざすわが君ぞきみ

住吉は松、箱崎は松、香椎宮は杉とそれぞれの神社に神木が存在している。神木と神社は一緒になって詠まれることが多い。特に、住吉の和歌には、松と一緒に詠み込まれているものが多い。千載集までの住吉の和歌は、全部で二十首見られるが、そのうち住吉と松が詠まれていたものが十五首にも上る。このことから、住吉といえは松であるという和歌としての常識が存在していたと考えられる。さらに、香椎の宮も二首見られるがどちらの和歌も香椎の宮と杉が詠まれていた。ここにも和歌の常識が存在していたと考えられる。そのほかの和歌にも神木と神社が詠み込まれているものが見られ、拾遺集卷十神樂歌五九二には平野神社と綾杉が詠み込まれており、神社歌を詠むうえで神社と神木が組になって使われることが一種の通例と

勅撰和歌集における部立「神祇部」について（水尻）

なっていたものと見ることができる。

次に、神社や神様に対して気持ちや述べた歌の種類である。和歌の内容に見られる心情は、祈願・謝意・訴歎・賛美が見て取れる。前に挙げた四つの心情を持つ和歌は、次のような和歌である。

千載集卷二十神祇歌一二七三（祈願）

加茂社歌合とて人／＼勧めてよみ侍ける時、

述懐の歌によめる

賀茂重保

君をいのる願ひを空に満てたまへ別雷の神ならば神

千載集卷二十神祇歌一二五八（謝意）

白河法皇熊野へまいらせ給ける御供にて、塩

屋の王子のを前にて人／＼歌よみ給けるによ

み侍ける

後三条院内大臣

思ふ事汲みて叶ふる神なれば塩屋に跡を垂る、なりけり

千載集卷二十神祇歌一二六五（賛美）

俊恵法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さへぬれば霜はをきけり

千載集卷二十神祇歌一二七一（詠嘆）

片岡祝にて侍りけるを、同社の禰宜に渡らん

と申けるころ、よみて書き付け侍ける 賀茂政平

さりとともと頼みぞかくるゆふだすき我片岡の神と思へば



そのちなむ禰宜にまかりなりにける

神社への祈願は、拾遺集卷十神樂歌五九三から見られ、千載集に至るまで読まれる。後拾遺集になり、卷二〇雜六・一二七七のような、祈願だけではなく神を賛美する和歌も見られるようになった。さらに、続詞花集・千載集になると、続詞花集卷八・三七九や千載集卷二〇・一二六二、一二六三等の訴歎や、千載集・一二六〇、一二六一等の賛美などの歌が多くなる。

詠まれている心情を見ていくと、すべての和歌が、神や神社に対し信仰心を持ち、敬うべきものとして扱っていることが分かる。しかし、心情を深く見ていくと違いがあることが見て取れる。祈願は、神に対しての祈願を詠み込み、「神であるならば叶えてくれるであろう」という期待に溢れている。謝意は、祈願したことを叶えてくれた神に対して感謝し、神を讃えた歌である。訴嘆は、祈願したことが叶えられず時が過ぎたことを嘆く歌である。賛美は、神域や神徳を讃える歌である。

以上から、祈願や謝意は、神や神社が信仰するものとして高貴に扱われ、神は讃えられる存在であるが、訴歎においては長年の信仰でも叶うことのない口惜しさが当てつけのように現れている。さらに、嘆くことで、願いを叶えてもらおうとする新しい形の祈願が見られるようになった。和歌の内容が、詠んだ人物の心情を中心として表現されるようになっていく。神詠や

伝承・起源を詠んだ和歌だけではなく、神社や神に対しての作者の心情がそのまま詠み込まれた和歌も採録されるようになり、さらに詠み込まれる心情も多様化している。

前記の神木と神の歌においても、採録され始めた拾遺集には伝承を詠むものも見えたが、時代が下ると通例として神社と神木が詠み込まれるようになることで、和歌の持つ内容も多様化していった。

次に、歌合についてみていく。歌合で詠まれた歌は全部で十二首見られた。さらに勅撰集順で見ていくと、後拾遺集に一首、春日で詠まれたものがあり、詞花集に二首、広田と住吉で詠まれたものがあり、千載集に八首、住吉と広田と賀茂で詠まれたものがある。神社で歌合が行われるようになり、神祇に関する和歌を詠む機会が増え、採録される歌数も増えていったと考えられる。

いくつかの視点で神社歌についてみてきたが、神社歌が多く採録されるようになったことは、神祇部が成立したことに変わりがあるだろう。古今集では見られなかった神社歌が、拾遺集で初めて見られ、千載集に至るまでに採録歌数が増えている。千載集はほとんどが神社歌である。さらに、神社歌は配列意図があり、拾遺集・後拾遺集では和歌の内容で配列されていたものが、続詞花集・千載集では神社のまとまりで配列されるよう



になった。また、神社歌の採録数の増加とともに和歌に詠み込まれる心情も多様化している。

### おわりに

千載集神祇部の成立について、神楽歌・大嘗会の歌・神社歌の観点から見てきた。神楽歌は古今集・拾遺集に採録され歌謡である。歌謡としての和歌は神楽歌だけではなく大嘗会の風俗和歌も当てはまる。大嘗会の風俗和歌は古今集・拾遺集では神楽歌に採録され、歌謡としての和歌として分類されていた。しかし、後拾遺集の撰者の意図により和歌の内容によって分類され、大嘗会の風俗和歌は天皇の祝いの和歌であるため賀の部立に採録されるようになった。そのため、大嘗会の風俗和歌は神祇の部立からは見られなくなった。一方で、千載集で初めて見られた大嘗会の神遊びの歌は、採物が詠まれ神とのつながりが強くみられたため神祇部に採録されたと考えられる。また、神社歌は古今集では見られなかったものの、拾遺集で初めて現れてから千載集に至るまでに採録歌数が増えている。さらに、拾遺集・後拾遺集では和歌の内容で配列されていたものが、続詞花集・千載集では神社のまとまりで配列されるようになった。

以上のことから、神祇に関する部立は撰者の意図によって、

うたうことに重きを置いた歌謡の部立神楽歌から、文学としての和歌である部立神祇部に変化したと考えられる。このような過程を経て千載集の神祇部は成立したと考える。

### (注)

(1) 兼築信行「中世和歌と神道―部立・神祇をめぐる―」

『解釈と鑑賞』一九九五年二月、至文堂

(2) 本文中の和歌、現代語訳は、以下の書による。

小島憲之 新井栄蔵『新日本古典文学大系5 古今和歌集』

(一九八九年二月二〇日、岩波書店)

片桐洋一『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』(一九九〇

年四月二〇日、岩波書店)

小町屋照彦『新日本古典文学大系7 拾遺和歌集』(一九九〇

年一月十九日、岩波書店)

久保田淳 平田善信『新日本古典文学大系8 後拾遺和歌

集』(一九九四年四月二〇日、岩波書店)

川村晃生 柏木由夫 工藤重矩『新日本古典文学大系9 金

葉和歌集 詞花和歌集』(一九八九年九月二〇日、岩波書

店)

片野達郎 松野陽一『新日本古典文学大系10 千載和歌集』

(一九九三年四月二〇日、岩波書店)

勅撰和歌集における部立「神祇部」について(水尻)

(3) 鈴木徳男『新注和歌文学叢書7 続詞花和歌集新注上』

(二〇一〇年十二月二十五日、青蘭舎)

鈴木徳男『新注和歌文学叢書7 続詞花和歌集新注下』

(二〇一一年二月二十五日、青蘭舎)

続詞華集は詞華集と千載集の間に成立した私撰集である。

撰者は藤原清輔である。二条院(天皇)の下命による勅撰集となる予定であったが、清書をしているときに崩御に遭い、奏覧に至らなかったため私撰集となった。部立には神祇が見られ、続く千載集以後勅撰集の先駆けとなったと考えられる。本文中の和歌、現代語訳は、同書による。

(4) 『一冊の講座 古今和歌集―日本の古典文学4―』

(一九八七年三月一日、有精堂出版)

(5) 八木意知男『大賞会和歌の世界』(昭和六一年六月五日、皇學館大學出版部)

(6) 『和歌文学大辞典』(平成二六年二月一日、株式会社古典ライブラリー)

(7) 『日本国語大辞典第二版』(二〇〇〇年十二月二〇日、小学館)

(みずしり なるみ・岐南町立東小学校)